



昨年の12月30日に突然、知人でウィーン・フォルクスオーパーのヴァイオリニストからメールが

届いた。内容は、12月31日からサントリーホールで行われるニューイヤーコンサートで演奏する為に来日したとのことであった。そして、1月2日の演奏会に招待したいとあったので、家内と行くことにした。彼女の来日は5年ぶりであったのだ。当日の演奏は、以前に聴いた時よりも非常に良かった。そして演奏を聴きながら、このオーケストラの奏者達は、気品溢れる街並みと自然な流れを感じさせる音楽の都ウィーンに住んでいる人達なのだ。とか、彼女が来日するのは今回が最後かな？等と思っているうちに、つい涙が溢れ出てしまった。

そのウィーン市主催のアドヴェント国際合唱祭に参加しないかという打診が昨年の8月下旬に、私の指導している女声コーラス“グリーン”にあったので、団員80名中30名（楽悠クラブの飯泉陽子



オーベルンドルフの記念礼拝堂前にて

さん、高瀬浩衣さん、前岳良子さんの3名を含めて）の希望者で参加することにした。

アドヴェント合唱祭は、11月25日から12月

18日の間に13回開催され、ヨーロッパの各国から70団体が参加、30分ずつ演奏する祭典であった。そして唯一日本から参加した“グリーン”は最終日の12月18日（日）のプログラムの最後に演奏することになった。

12月15日に我々は羽田をたって、ミュンヘン経由でウィーンに着いた。その翌日に早速、日本から予約していた小さなホールで練習をしたのだが、そのホールの残響がとっても自然だったので気持ちよく練習が出来た。そして再び我々の演奏する18日の午前中にもウィーン市で用意してくれた練習場に行ったのだが、そこも気持ちの良い響きの会場であった。これは感覚的な文化の違いであるのかも

しれないが、日本では殆どの練習場が意識的に残響を少なくしているので空間の響きを楽しむことが出来ないのだ。音楽は音源のみではなく、空間の響きが一体になってはじめて音の豊かさが生まれるものだと思う。また、日本人の中に、コンサートは音楽を聴くだけで目的をはたしたと思っている人はいないだろうか。カフェではお茶やコーヒーを味わえば良いし、レストランでは美味しい食事ができれば良いと考えてはいないだろうか。勿論それでも目的をはたしていることになるのだが。例えば、コンサートホールに入った時に華やかな雰囲気が漂っていたなら、より心豊かな気分で演奏を聞くことが出来るのに。また、綺麗なレストランやカフェでも同じようなことが考えられる。



さて、18日（日）の6時に演奏する時間がやってきた。満員

の聴衆の温かい拍手の中を舞台上上がり、演奏を始めたのだが、曲が終わる度に盛大な拍手が長く続いた。こんな心のこもった拍手は私には考えもつかないことであった。どうしてこんなにも温かい拍手が自然に出来るのだろうか。これもヨーロッパの文化なのだろうか。そして、この演奏会の後に開かれたレセプションでは、ウィーン市の市議会議長からお礼の言葉を頂き、その日も無事終えることが出来た。

翌19日に、ウィーン中央駅から列車に乗ってモーツァルト生誕の地、ザルツブルクに向かった。そして、そこでもクリスマスマーケットを楽しんだあと、ザルツブルクの駅からローカル線に乗ってオーベルンドルフに行き、メンバー全員の念願でもあった「きよしこの夜」を記念礼拝堂の中で歌うことが出来た。「きよしこの夜」は1818年12月24日にオーベルンドルフの教会のパイプオルガンが壊れて音が鳴らなかったため、急遽モア司祭と小学校教師のグルーパーによって作曲された6節からなる聖歌で、原譜はギター伴奏になっている。